

Titibu431

秩父平成6年3月 43号

日本人と植民地

丹 了徹
60期3-8
(東松山市)

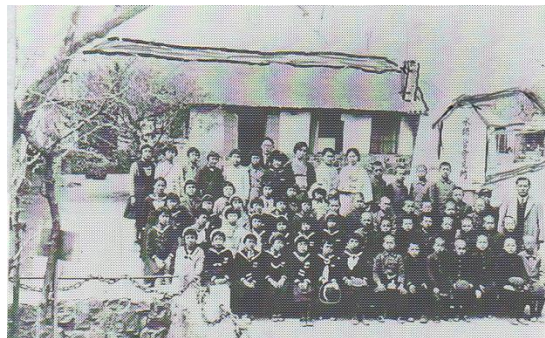
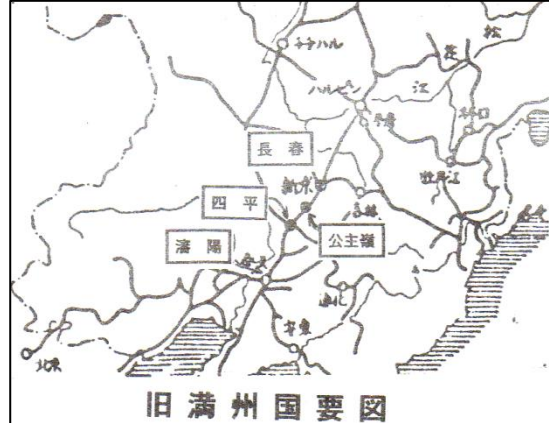


昨年長男一家が夏休みを兼ねニューヨークから一時帰国をしたので、孫を連れて近所の子供動物自然公園に行った。公園の中にはお金を払えば小馬に乗せてくれる処がある。但し5歳以下の子供は乗馬出来ないと注意書きが出ている。孫は4歳であったが多分わからないだろうとキップの窓口に並ばせた。処が窓口の小父さんは孫に『坊や、いくつ?』と質問した。孫は黙って4本指を差し出した。小父さんは首を振って『ダメ』。

この事は私に満州時代印象に残った一小事件を思い出させた。話は逸れるが、私は満州で生まれ陸士に入るまで満州で育った。その間日本を訪れたのは小学生の時一度、中学4年の時一度で両方合わせても滞日一ヶ月に満たない。1932年満州国建国以来私共は五族共和を理念として教育され単純にそれを信じて育った。それを唱えた日本人政治指導者の多くは腹の中では別の事を考えていたかも知れぬが、子供の知恵の及ぶ処ではない。何れにせよ私共は満人、漢人、朝鮮人、蒙古人と共生し、文字通り民族共和の実践の場にあった。

話は戻る。私は生まれた町、公主嶺(新京

と四平の中間にある)から新京(現在の長春)の中学まで片道一時間半の汽車通学をしていた。



小学校の遠足：日露戦争の古戦場水師営

3年生の頃であったと思うが、ある日、新京に向かう汽車に途中の駅から人品卑しからざる中国人父子が乗ってきた。父親は大柄で長衫(長い単衣)を着てお椀の様な帽子かぶった偉丈夫である。女の子は見た処6~7歳で花模様の中国服を着て頬を赤く塗った可愛い子である。恐らくお祭りにでも行く途中であったろう。当時中国人の多くは非常に不潔で車中彼等の横に座ると、私共の腰手拭いにシラミがつくのは珍しい事ではなかったから彼等父子の服装は目立った。

暫らくすると日本人の車掌が検札に来た。父親に子供は何歳かと聞いている。次に子

供に対し同じ質問をした。その答え聞いた途端に車掌はその父親の頬をパンと大きく平手打ちした。子供の告げた年齢は無料で乗車出来る限界を超えていたに違いない。車掌と父親は声高に言い争っていたが中国語なのでよく解らない。父親はカンカンに怒って次の駅で子供の手を引いて下車した。或いは車掌に引き下ろされたのかもしれない。理由はともあれピンタというのは中国人にとり最大の侮辱である。おまけに人前である。彼等にとり折角の楽しい旅行がこれでオジャンになってしまった。そして彼等二人に加え周囲で見ていた車中数十人の中国人を反日に追い遣ったに違いない。私は車掌のやり方に憤激を覚えたが、日本の唱えた五族共和はこの程度のものであったのである。

先日、日経の夕刊の『あすへの話題』欄に日産自動車の久米会長が飛行機の中での経験を書いておられた。東南アのスチュワーデスに対し高圧的に無理な文句を言っている日本人がおりスチュワーデスは神経質になり益々へまをする。彼女が声ふるわせて謝るのを聞いて不愉快になったというのである。

私はこれを読んで日本人は戦前から全く進歩していないとおもった。どうして日本人はアジア人に対し威張りたがるのだろうか。英国に留学したアジア人の多くが親英的になったのに、日本に留学した人は殆ど反日的になったと言われるのもここに理由がありそうだ。しかしもっと根本的な原因があろう。その一つとして英国の場合、かつては多くの植民地を持ち、現地人に英国パスポートを与え、英本国に移住すれば英国人と同様の生活上の給付、権利を与え

たこと、FAIR ということを非常に重視した紳士的環境が人種を超えて人々を親英的にしてきたのではないかと思われる。また英国は経済的搾取はしても、現地人の文化一言語、宗教、習慣には干渉しなかった。民族の文化は権力では変えられないことを英国人は認識していたのかも知れない。